

1. 前回確認

①日蓮仏教の見地でいう「成仏」とは

※「釈尊の因行果徳の二法は～」（『観心本尊抄』）

因行がぼさつ行。果徳は成仏。成仏とは悟りを得ること。

悟りの内容とは「仏知見」

「仏知見」の中味は「一切衆生皆悉ぼさつ」。

「一切衆生皆悉ぼさつ」とは衆生は本来成仏確定者であるとの定義。

「本来成仏確定者」とは中古天台の成仏観では決してない。本覚誇りではなく、そこには「ぼさつ行」の実践が絶対条件である。

それを明かしたのが法華経である。

（注）「ぼさつ」と平仮名表記とする理由

十界中、九界の衆生が総て菩薩という捉え方が本門法華の立場。

故に三乗中の「菩薩乗」と区別する為に「ぼさつ」と表記。

法華宗に席を置く、梵本法華経研究者・荻谷定彦博士の論に依拠した。

植木雅俊氏はじめ現代の仏教学者は「ぼさつ」の表記はしないが意図する所は同傾向にある。

（荻谷定彦博士プロフィール）

法華宗興隆学林、種智院大学教授、中村元博士主催東方学院講師

著書『法華経一仏乗の思想』、『法華経（仏滅後）の思想』他論文多。

※「ぼさつ行」とはその「一切衆生本来ぼさつ」を明かした法華経を自ら唱え、他にも唱えさせる行為。

末法に於いてはその法華経の肝心たる五字七字の題目を自ら唱え、他にも聞かせ。更に唱えさせる行為をぼさつ行と為す。

衆生のぼさつ行実践の姿が成仏行である。それを仏眼で見たなら、それこそが成仏の相。

その「成仏相」は「唯仏与仏」なるが故に我等衆生は可視化できない。

故に衆生はそれを信受するのみ。「以信代慧」

久遠本仏釈尊も同様。題目による説法教化を瞬時でも停止したなら仏ではなくなる。

『寿量品』「我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命、今なお尽きず、復上の数に倍せり」

②「三世諸仏説法の儀式」「五仏同道」

※法華経の真実性を証明する上で重視された教説。

※総ての仏の教化順序次第である。この順序次第から外れる仏は仏ではない。

「小乗→権大乘→実大乘（法華経）→五字七字の題目」

阿弥陀仏も大日如来も薬師如来も一切の仏は総てこの順序次第で教化している

故に阿弥陀仏も極楽へ往生した衆生には法華経、お題目を説いていると言える。

『阿弥陀経』は極楽の状況は説くが説法内容には触れていない。管見の限りでは

『観無量寿経』に「妙法を演説して苦の衆生を度したまう」「妙法を演ぶ」が二カ所。

「広く諸法の実相と罪を除滅する法を説く」のみ。中心教義は極楽往生する為のノウハウ。

※「三世諸仏説法儀式」こそは久遠本仏釈尊の教化活動の姿を示すもの。既に方便品で久遠開顕が密示されていることになる。

③譬喩品冒頭の最重要ポイント

※方便品を聞いて気付いた舍利弗の懺悔段

95頁③-1～98頁③-16

・95頁③-3、4

「是我等が咎なり、世尊にはあらず。ゆえはいかん もし我等所因の阿耨多羅三藐三菩提を成就することを説きたまうを待たば」

「方便随宜の所説を解らずして～自ら剋責しき」

早合点してまだお釈迦様の本懐でない小乗の教えに飛びついて「我は解脱した」と思い込んでいた。しかし、それは見当違いでむしろ決して成仏出来ない落伍者だと、ずっと自分を責め続けていました。

「終日竟夜毎に自ら剋責しき」→『寿量品』「良医治子喩」「常懷悲感 心遂醒悟」に通じる心境

※舍利弗の覚醒

96頁③-5

「而るに今、仏に従いたてまつり～

今日乃ち知んぬ。真にこれ仏子なり。仏口より生じ法化より生じて仏法の分を得たり」
方便品で遠い昔、すでに私も「ぼさつ」。すなわち成仏確定者だったんだことを教えられた。その釈尊の説法を聞いてそれを今日思い出しました。私は紛れもない真の仏の子なのだ。仏の口から生まれ、仏法より生まれ、仏法の本分を悟り得ました。しかし、その為には「ぼさつ行」の実践が絶対条件なのですね。

それが次の文に繋がる。

99頁③-22

「我定めた正に作仏して 天・人に敬わるることをえ 無上の法輪を転じて
もろもろの菩薩を教化すべし」

※「**本来の声聞とは仏の法を聞く声聞ではなく、それを衆生に聞かせるのが本来の声聞なのだ**」と気付いた。

↓
（「菩薩を教化すべし」）

※上記の告白は『信解品』四大声聞の告白にも繋がる

147頁④-61

「我等今 真にこれ声聞なり 仏道の声を以て 一切をして聞かしむべし」

99頁③-23、24

上述のまとめ。釈尊が再び述べる。

「我れ昔かつて二万億の仏の所において 無上道の為の故に 常に汝を教化す
汝亦長夜に我に随って受学しき」

「汝今ことごとく忘れて 便ち自ら滅度を得たりと謂えり

我今還って 汝をして本願所行の道を憶念せしめんと欲するが故に

諸々の声聞の為に、この大乘経の妙法蓮華・教菩薩法・仏護念と名づくるを説く」

「今悉忘」れていた「声聞」の舍利弗に「ぼさつの法」を「憶念」させる為に説いたのが「妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念」なのだと言われた。

「妙法蓮華」とは「一切衆生皆悉ぼさつ」を教える法であり「その修行者を仏は護念する」

※初めて法華経に至って聞いたのではなく遙か昔に既に教えられていた。それをすっかり忘れていた。

※ 日蓮仏教「本已有善」「本未有善」にも関連。

仏の視点に立てば「本已有善」、衆生の視点に立てば「本未有善」

参照『太田左衛門尉御返事』定1497頁

三世の諸仏の説法の儀式の大要也。教主釈尊寿量品の一念三千の法門を証得し給事は三世の諸仏と内証等きが故也。但し此法門は釈尊一仏の己証に非ず 諸仏も亦然也。我等衆生の 無始已来六道生死の浪に沈没せしが、今教主釈尊の所説の法華経に奉値事は乃往過去 に此寿量品の久遠実成の一念三千を聴聞せし故也。難有法門也

※上記は正に舍利弗の覚醒に通ずる

1. 本日拝読箇所

99頁③－25

・舍利弗への授記。

「授記」※資料参照。

①本来「授記」は権大乘教に於いて仏が菩薩の未来成仏を保証するものであった。
②しかし、法華經に至って権大乘教が否定した声聞への授記となった。これが法華經の説く二乗作仏論。

誰でもの仏教を標榜した権大乘教が二乗除外という例外を設けたことへのアンチテーゼ

③法華經以後、授記思想の展開。中期大乘仏教は『涅槃經』による仏性論、『如来藏經』『宝性論』『勝鬘經』等による如来藏論が形成されていく。それは一切衆生に遍く仏性、如来藏が具わっており、それが成仏の因となるという捉え方である。

これ等が衆生成仏の理論的根拠となり、普遍化され仏からの一々の記別を必要とする授記作仏論は姿を消してゆくことになる。

④法華經に於ける授記の捉え方

※解脱を目標としていた二乗に対して成仏に向かわしめる目的があった。

まず二乗の目標とした、輪廻からの解脱を否定し、何度も娑婆に生を受けることを教え示さなければならなかった。その為命の永遠性を表現する方法として無数回の輪廻を示す必要があったのではないか。

※権大乘教は像法の教えなるが故に菩薩に無量劫の歴劫修行を説く。更には権大乘教といえども所詮は専門家の仏教であったため、「無量無辺不可思議劫という無限とも言うべき未来に成仏する」という観念論的教えが通用したかも知れない。

※末法衆生の授記の捉え方

しかし、日蓮仏教の見地からすれば末法の仏教専門家でない一般在家者が救われる為の法華經の授記の本意をどう受け止めればよいか。

授記は上記の如く永遠の未来での成仏保証である。しかし、末法の下機下根の衆生にとっては途方もない未来に成仏すると言われても、待ちきれないだろうか？実感出来るだろうか？「もし不当たり手形だったらどうする」そんな確証がないことに勇躍歓喜できるだろうか？

その疑問に対する答えは以下の通り。

文上は未来成仏であるが、文底はこの時点で成仏している。

法華經は舍利弗等の授記譚を歴劫修行的表記を取っているが、末法に於いてはそんな悠長なことを言っていられない。即身成仏を説く。

なぜなら、ぼさつ行の実践、それ自体が成仏行である。そして我等はそれを信受する当所に成仏があると説くのである。

詳細は従前に述べてきた如し。

ここに大聖人がよく述べられる「教弥実位弥下」（『四信五品鈔』）に表される通り、これも法華經の超勝性の一つである。

⑤授記も「三世諸仏説法儀式」の表記を通して自ずから永遠性を密示

譬喩品 理解の最重要ワード

104頁③－43・44

「世尊、我れ今疑悔無し～千二百の心自在なる者～未だ聞かざる所を聞いて皆疑惑に墮せり。善哉世尊願わくは四衆の為にその因縁を説いて」

※譬喩品冒頭から語ってきた舍利弗の悟りと懺悔譚を舍利弗に替わって釈尊が説く。

「三車火宅喩」理解のポイント

1. 内容の不自然さ

- ・何故父親は火宅に飛び込んで子どもを助け出さなかったのか。保護責任者遺棄罪。

2. 不自然な描写の裏に込められた真実とは

- ・舍利弗の悟りと懺悔を釈尊が舍利弗に替わって語る

「ここまでお釈迦様があの手、この手を駆使して私たちに救い導きだそうとして下さっていたのに、全く気付かず好き勝手な事をしていた私たちに何卒お許しください。そんな私たちを決して見捨てることがなかったお釈迦様。なんとお礼とお詫びを申し上げればよいのでしょうか」

上記の言葉を補いながら三車火宅喩を読むと不自然さが解消される。

105頁③－46～

- ・三車火宅喩は舍利弗の悟りと同時に懺悔談。それを釈尊が舍利弗に替わって説く。

106頁③－48

・我よく此所焼くの門より安穩に出ることを得たりといえども、しかも諸子等、火宅の内において嬉戯に樂著して、覺えず知らず、驚かず怖じず。火来たって身を逼め、苦痛己を切むれど、心厭う患せず、出でんと求むる意無し」

107頁③－50、51、52

- ・「亦復何者かこれ火、何者かこれ舎」

当に顛倒の状態

108頁③－53

- ・「時に諸子等、おのおの父に白して言さく～願わくは賜与したまえ」

一言くらいお礼を言うべきであろう。これぞ顛倒の極み。危機にあったことも知らない。この裏には舍利弗の深い深い懺悔あり。「なんと脳天気」「なんと愚かだったのでしょか」

- ・一仏乗とは軽自動車も普通自動車も最高級車も一つに乗せて運ぶキャリアカー
- ・「軽に普通車になれ。普通車に高級車になれ」と言うのではない。その姿のまま役目を果たせ

(結び) 法華経は懺悔の経。

- ・「三車火宅喩」、「長者窮子喩」在世仏弟子の懺悔談
- ・「良医治子喩」滅後の衆生の懺悔談
- ・根底は寿量品で明かされた仏の大慈悲 「見守る心」「信じて待つ心」